

2018年度博士論文（要約）

外国人留学生のインターンシップを通じた学びに関する研究

桜美林大学大学院 国際学研究科 国際人文社会科学専攻

横須賀 柳子

## 目次

序章 研究の背景 .....	1
0.1 問題の所在と研究目的 .....	1
0.2 インターンシップをめぐる社会的背景 .....	2
第1章 先行研究および研究概要 .....	7
1. 学びに関する研究 .....	7
1.1 理論的枠組み .....	9
1.1.1 文化歴史理論 .....	9
1.1.2 状況的学習論 .....	10
1.1.3 「活動理論」 .....	12
1.1.4 学びの深まりと広がり .....	15
1.1.5 共変移論 .....	17
1.1.6 アイデンティティ .....	18
1.1.7 自己概念の確立 .....	19
1.1.8 アイデンティティ形成のプロセス .....	22
1.2 職業領域での学び .....	24
1.2.1 予期的社会化 .....	24
1.2.2 インターンシップに関する研究 .....	25
1.2.3 参加前後の評価 .....	25
1.2.4 インターンシップの種類と効果 .....	29
1.2.5 外国人留学生のインターンシップ .....	30
1.2.6 先行研究の問題点 .....	31
1.2.7 理論のまとめと本研究の視座 .....	32
1.3 本研究の概要 .....	36
1.3.1 研究課題 .....	36
1.3.2 調査協力者 .....	36
1.3.3 研究方法 .....	38
1.3.4 収集データ .....	39
1.3.5 分析的枠組み .....	41
1.3.6 分析方法 .....	43
1.3.7 倫理的配慮 .....	44
1.3.8 本論文の構成 .....	44
第2章 外国人留学生のインターンシップ参加の意味 .....	46
2.1 本章の概要 .....	46
2.2 参加前の「現在の自分」と「過去の自分」とのつながり .....	47
2.2.1 社会文化的制約と押し出された自分 .....	47
2.2.2 社会文化的促進と引き上げられた自分 .....	49
2.3 「現在の自分」の不確実性の低減 .....	51
2.4 「なりたい自分」の希求 .....	52
2.5 参加後の「現在の自分」 .....	54
2.6 参加後の学びの振り返り .....	57

2.7 考察.....	60
第3章 概念的道具を媒介した学び – 社会科学系実習生の事例 – .....	63
3.1 本章の概要.....	63
3.1.1 「道具」の分類.....	63
3.1.2 実習生の用いる道具.....	65
3.2 ティとエンの実習概要.....	65
3.2.1 業界特有用語の専有.....	67
3.2.2 道具の連鎖と意味変化.....	69
3.2.3 アイデンティティ変容.....	70
3.2.4 「なりたい自分」への接近.....	72
3.3 キョウの実習概要.....	73
3.3.1 既習語の再解釈.....	73
3.3.2 「なりたい自分」への方向性確認.....	75
3.4 考察.....	75
第4章 物理的道具を媒介した学び – 理工学系実習生の事例 – .....	79
4.1 本章の概要.....	79
4.1.1 事例となるインターンシップの概要.....	79
4.2 ヨウの実習概要.....	79
4.2.1 道具を介した認知的徒弟制.....	80
4.2.2 実験道具と身体間の相互作用.....	83
4.2.3 暗黙知の専有.....	84
4.2.4 他者の介在.....	86
4.2.5 共同体内の分業.....	88
4.2.6 「なりたい自分」像の強化.....	89
4.3 タンの実習概要.....	90
4.3.1 「文化的透明性」の獲得.....	91
4.3.2 共同体内での「現在の自分」の布置.....	92
4.3.3 「なりたくない自分」の発見.....	93
4.4 考察.....	95
第5章 水平的関係にある他者とのアイデンティティ交渉.....	99
5.1 本章の概要.....	99
5.1.1 水平的関係にある他者との協働.....	99
5.1.2 集団形成に関わるアイデンティティ.....	100
5.1.3 事例となる実習生の概要.....	102
5.2 キムの実習概要.....	103
5.2.1 社会的アイデンティティによるカテゴリー化.....	103
5.2.2 個人的アイデンティティによる脱カテゴリー.....	105
5.2.3 「外国人」アイデンティティの顕現化.....	107
5.2.4 協調的集団への再カテゴリー化.....	109
5.2.5 「重要な他者」による評価.....	110
5.3 シンの実習概要.....	112
5.3.1 外集団への自己カテゴリー化.....	113

5.3.2 社会的アイデンティティによるカテゴリーの維持 .....	116
5.3.3 多面的アイデンティティによる役割演出 .....	119
5.3.4 実習担当者による評価 .....	120
5.3.5 チーム共同体の同異 .....	121
5.4 考察 .....	123
第6章 垂直的關係にある他者とのアイデンティティ交渉 .....	129
6.1 本章の概要 .....	129
6.1.1 アイデンティティ探求プロセス .....	129
6.2 オウの実習概要 .....	131
6.2.1 熟達者とのアイデンティティ交渉 .....	132
6.2.2 ロール・モデルとの接触による自己評価 .....	133
6.2.3 熟達者視点からの他者評価 .....	134
6.2.4 熟達者の観察による反映的自己 .....	135
6.2.5 顧客視点による他者評価 .....	138
6.2.6 熟達化の指標 .....	139
6.2.7 経営者とのアイデンティティ交渉 .....	141
6.3 「なりたい自分」のさらなる希求 .....	144
6.4 考察 .....	145
第7章 総合考察 .....	150
7.1 インターンシップ参加の意味 .....	150
7.2 インターンシップでの実践による学び .....	151
7.3 媒介物にみる学び .....	157
7.3.1 道具へのアクセス .....	158
7.3.2 視点・視野の拡大 .....	159
7.3.3 道具の連鎖と立体化 .....	160
7.3.4 身体的道具の感覚と情動 .....	161
7.3.5 概念的道具のことば .....	163
7.4 他者とのかかわりによるアイデンティティ形成 .....	165
7.4.1 予備的社会人の「多重成員性」 .....	166
7.4.2 自他間のアイデンティティ交渉 .....	167
7.4.3 個人内の矛盾・個人間の対立 .....	168
7.4.4 個人内の同調・個人間の協調 .....	172
7.5 インターンシップでの学びのまとめ .....	175
7.5.1 留学生への提言 .....	175
7.5.2 大学への提言 .....	178
7.5.3 企業への提言 .....	182
7.5.4 提言のまとめ .....	183
終章 本研究の意義・限界・今後の課題 .....	185
参考文献 .....	- 1 -
初出一覧 .....	- 14 -
図表リスト .....	- 15 -
付録 .....	I

資料 1	調査協力承諾書（留学生） .....	I
資料 2	調査協力承諾書（企業） .....	II
資料 3	事前質問紙調査.....	III
謝辞		

## 序章 研究の背景と問題の所在

日本社会では昨今、企業のビジネス現場でのインターンシップに参加する大学生が増加しつつある。日本におけるインターンシップの短い発達史の中でも、近年の実施数の増加は著しく、その機能的定義付けが不安定なまま量的拡大の一途をたどっているのである。その背景には、卒業前の大学在籍中に就職活動をするという教育の中に労働市場が組み込まれた日本特有の慣行がある。就職活動前に実施されるインターンシップには、大学、企業、政府などさまざまな立場の人々による複数の価値が混在する。産業界が利用しようとする採用選考機会と、教育界が位置づけようとする人間育成機会というインターンシップが含有する二重の価値の矛盾は、大学生の人生設計に対する焦燥感を煽る原因ともなっている。

また、日本の多くの大学機関は 18 歳人口の減少に伴う質的転換を喫緊の課題としており、インターンシップは大学から社会への移行を円滑につなげるための教育改革の一翼を担っているとも考えられる。生き残りをかけた大学が講じる一策として、海外からの留学生の受け入れもある。外国人留学生たちは大学機関の国際性を豊かにするばかりではなく、卒業後も日本社会の生産労働人口の減少や企業の国際競争力の向上のために活躍し得る存在であるはずだ。ところが、グローバルな高度人材予備軍としての外国人留学生に期待を寄せる反面、彼らをどのような人間として育成し、社会に輩出しようとしているのかといった根本的な問題が解決できないままに大学も少なくない。さらに、卒業後の動向を見てみても、実際に日本で就職をした留学生数は希望者に比して多いとはいえないのが現状だ。その一因に、ただ単に「日本で就職できればいい」という表面的な願望のみをもつ留学生のキャリア概念の希薄さがあることも指摘できる。

しかしながら、これまでの研究では、外国人留学生が大学領域と企業領域の間を架橋するインターンシップにおいて何を学び、将来の人生をどう展望するのかといった実態が十分に探究されてきたとはいえない。特に、今後日本が多くの労働者を受け入れようとするとき、有用な人材となり得る外国人留学生の企業でのビジネス実践の実態について解明することは、多言語多文化共生社会のあり方を探る上でも重要な課題となる。

そこで、本研究では、まず、国境を越える青年がインターンシップに参加する意味を明らかにし、次に、ビジネス実践を通じた彼らの学びを探究することによって、今後の大学教育のあり方への展望を開くことにする。

## 第 1 章 先行研究および研究概要

第 1 章では、本研究の理論的背景となる先行研究を概観した上で、研究課題を特定し、研究の概要を述べる。

### 1. 学びに関する研究

## 1.1 理論的枠組み

理論研究では、まず、従来の典型的な学校制度の中での個体能力主義的な学習観から開放された日常実践に基づく社会文化歴史的な「学び」に関する理論を概観し、次に、職業領域内の学びとしてインターンシップに関する先行研究を整理した。

学びに関する先行研究を概観すると、社会のパラダイム変遷に伴う行動主義、認知主義、構成主義という潮流の展開によって、学習は個人内部に取り込まれる命題的知識の獲得であるとする個体能力主義的な解釈から、社会的協働参加による他者との相互作用を通じた状況内での技能や知識の修得という理解への変遷がみられる（波多野 1996、西口 1999、佐伯 2010）。「文化歴史学派、社会歴史的アプローチ、活動理論、状況理論などの総称」（石黒 2004:ii）である「社会文化的アプローチ」の視座から先行研究を概括すると、「学び」というものは、個人の主体が伝統的な教室を超越して社会的実践共同体に参加することで、受容的に教えられた知識以上の概念の創造と探求を可能にし、実践を振り返りながら現在から過去を意味付けて、将来への展望を開いていく過程であると解釈される。

つまり、真正なビジネス実践による「学び」は、複雑な概念の理解、新しいアイディアを生み出す創造力、批判的思考、実用可能な知識の修得、共同体内外で接触する他者との協働性を含んだ「深い学習」（ソーヤー 2016:1）となるということだ。また、複数の領域間の越境は共同体内外で接触する他者との協働性によって初心者が熟達化する（Lave & Wenger 1991/1993）という垂直的学習ばかりではなく、自己や集団のあり方の変化という水平的学習（Engeström 1987/1999）による広がりをもたらすことにもなる。

個体主義的な知識の獲得としての「学習」と区別して、「学び」という語を積極的に用いた佐伯（1972）は、それを「よりよいものを求める人間本来の最も人間的な営み」として考えた。それは、識字教育に携わったフレイレ（Freire 2011:2）が、「人間の使命とは、『より全き人間であろうとすること』ということ」としたものと通底する。すなわち、人間が「よりよき者」、「より全き人間」となろうとし、よりよいものを得ようとする本質的な希求が、学びの根源にあると考えられる。これに基づき、本研究では「学び」を、人間がよりよいものとなろうと、習得した認知構造を通して外界と相互作用しながら知識を構成/再構成したり、アイデンティティを形成/再形成したりすることという意味で捉えることにした。

## 1.2 職業領域での学び

従来の日本でのインターンシップに関する研究には、各大学機関、公的機関、民間企業などによるアンケート調査の成果報告にとどまっているものが多い。また、特定の仮説を検証するために調査者が予め統制した質問や心理尺度による定量調査では、参加者本人の実感値としての評価の傾向は把握できるものの、実際にどのような現場において業務や課題を遂行し、その過程でどのような道具や他者と相互作用をし、そこからどのような学びが導かれたのかといった個別に詳細な内実までを知ることはできない。さらに、「キャリア

ア」の意味を就職活動に向かうための職業選択とする調査では、その成果を能力・スキルの向上や職業観・就業観の醸成といった範囲に矮小化してしまいがちで、人の人生の一過程としての学びの様相を取りこぼさず拾い切れるとも言い難い。しかも、個人の生涯にわたる広義の「キャリア」形成にかかわる研究の中でも、異言語異文化を背景とした外国人留学生のインターンシップに関する研究はきわめて少ないことが指摘できる。

### 1.3 本研究の概要

以上のような従来の研究についての問題を踏まえて、本研究では次の3つの研究課題を設定した。

研究課題 1. 外国人留学生はインターンシップに参加して何を学ぼうとしたのか

研究課題 2. 実習生はインターンシップの実践過程でどのように学んだのか

- 1) ビジネス領域の中でどのように道具を使い、その操作を通してどのような内的表象を手に入れるのか
- 2) どのような他者との相互交渉を通して、アイデンティティを形成、再形成するのか

研究課題 3. 実習生はインターンシップで何を学んだのか

本研究の協力者は、東京都内の同一私立大学に在籍する学部2年および3年（調査実施当時）の外国人留学生11名（韓国出身2名、中国出身9名）である。11名のうち9名は社会学系の学部所属し、2名は理工学系の学部所属していた。協力者たちの滞日年数は約4年で、全員が「日本語能力試験」（国際交流基金・日本国際教育支援協会主催）で最上級と認定されている「N1」を取得している。

協力者が参加したインターンシップには、当大学キャリア関連部署が学部3年生を対象として主催するプログラム（「学内プログラム」）と、学外の同種業界の協会が外部コーディネーターに委託し、外国人留学生を対象に学年を問わず実施しているプログラム（「学外プログラム」）の2種類がある。どちらのプログラムも毎年夏季に1度、2日から20日の間、人材育成を目的として無報酬で実施されている。調査は、2012年度、2013年度、2014年度のプログラムの前後に実施した。

これらの学内外プログラムの実習形態は、次の4つのタイプに分類された。1) 企業から与えられたテーマに沿って、実習生同士のチームが企画立案の課題に取り組む「プロジェクト企画型」、2) 正社員と同様の基幹的な業務を遂行する「中核業務型」、3) アルバイトやパート社員と同様の補助的な業務に携わる「周辺業務型」、4) 実習生同士のディスカッションを含むセミナー研修を受講する「講義型」である。

本研究の分析的枠組みとして、「アイデンティティの形成プロセス」（Grotevant 1987）を援用し、ビジネス実践において「なりたい自分」を標榜する実習生が、よりよい者となるために自己を探求していく動的なプロセスの中で学びが形成されるという構図を設定した。データ収集には、社会文化的な文脈の中で人間の実践行動の意味を読み解くために用



いられる解釈的アプローチの代表的な手法としてのエスノグラフィーを使用した。

分析には複数のパーソナル・ドキュメントを多元的に使い、質的データの解釈の妥当性を高めた。収集したデータは、実習前に稿者が実施した「質問紙調査」の記述データ、実習生が毎日記録し、企業の実習担当者と交わした「実習日誌」、稿者が依頼し、実習生が実習中の自身の日本語使用について記録した「日本語に関する日誌」、実習生がまとめた「実習報告書」と、これらを基にして実習後に稿者が実施した「半構造化インタビュー調査」の文字化データである。研究協力者との半構造化インタビューで得られた内容をより客観化するために、受け入れ側の企業経営者および実習担当者、他の社員との「半構造化インタビュー調査」も実施した。また、学外プログラムで課された実習生たちによる受け入れ企業経営者へのインタビュー・セッション（「社長インタビュー」と呼ばれる）を録音した「談話データ」の文字化資料と、実習生がそれを「実習報告書」に執筆した当該箇所の記事も使用した。

この他に補助資料として、「プロジェクト企画型」の実習生チームがパワーポイントで作成した「企画書」と、それを社員の前で口頭発表した様子を録音した「プレゼンテーション・データ」の文字化資料、業務関連資料、稿者による事前オリエンテーション、実習見学、事後報告会での「観察メモ」も使った。

本論文は、序章から終章まで全 9 章で構成される。序章、第 1 章を踏まえて、第 2 章では実習期間全体のプロセスを大枠とし、研究協力者全員を対象に、研究課題 1「実習生はインターンシップに参加して何を学ぼうとしたのか」および研究課題 3「実習生はインターンシップで何を学んだのか」について分析考察する。続く第 3 章から第 6 章までは、個別の事例を取り上げ、実習期間内での学びの詳細について検証する。この 4 つの章では、研究課題 2「実習生はインターンシップの実践過程で、どのように学んだのか」と、研究課題 3「実習生はインターンシップで何を学んだのか」の解明を試みる。このうち第 3 章と第 4 章では、研究課題 2「実習生はインターンシップの実践過程でどのように学んだのか」の下位課題である「1) ビジネス領域の中でどのように道具を使い、その操作を通してどのような内的表象を手に入れるのか」について、個人と対象世界とを媒介する「道具」に焦点を当てて検証する。また、第 5 章と第 6 章では、もう 1 つの下位課題である「2) 他者との相互交渉を通して、どのようにアイデンティティを形成・再形成するのか」について「他者」に着目して論を進める。第 7 章ではそれまでの論考を総合的に考察した上で、留学生、大学、企業に向けて提言をする。そして最後に、終章では本研究の意義と限界、今後の課題について述べる。

## 第 2 章 外国人留学生のインターンシップ参加の意味

第 2 章では、外国人留学生にとってのインターンシップへの参加の意味を明らかにすることを目的とし、協力者 11 名全員のデータから、研究課題 1「実習生はインターンシップに参加して何を学ぼうとしたのか」および研究課題 3「実習生はインターンシップで何を

学んだのか」について検討した。実習期間全体を1つの時間的単位として捉えて、マクロな社会文化的要因とミクロな個人の思考との相互作用を、時空間の移動という切り口から分析した。その結果、外国人留学生たちは「どこの国で、いかに生きるべきか」を核たるテーマとして、自分の身を置くビジネス環境とその中での自分自身の位置付けについての興味と関心からインターンシップに参加したことが明らかになった。

留学生たちは、母国と日本、大学と企業間の多層な文脈を移動しながら、過去、現在、未来を結ぶ自己探求の機会として、インターンシップを意味づけていたのである。母国から日本へ移動した過去の自分が日本で就業する「なりたい自分」を希求するとき、日本の企業および自己についての情報が不足していることが大きな課題となる。しかしながら、大学領域にいるままでは、果たして自分が本当に日本の企業で就業できるかを知ることはできない。そこで、インターンシップに参加し、ビジネス現場での実践を通して、日本の企業の中での自身の能力や適性を判断したり、他者との関係において自己の位置づけを相対的に把握したりすることで、将来生きるべき国を見極めようとしたのである。実習後には企業や自己についての不確実性は低減され、研究協力者全員が日本の企業で就業できる「なれる自分」を見出したことが判明した。

### 第3章 概念的道具を媒介した学び — 社会科学系実習生の事例 —

第3章では、個人と実践を媒介する対象志向的な道具に焦点を当てて「どのように学ぶか」、「何を学ぶか」について検証することを目的とした。社会学系専攻の実習生3名による実践の事例から、将来の職種として希望する営業職や事務職の業務で典型的に用いられるだろう「概念的道具」としてのことばを媒介とした学びの様相について論じた。分析結果から、真正な企業空間の内外に埋め込まれた多種多様な道具を介して、実習生たちが随時「なるべき自分」や「なりたくない自分」を見出しつつ、「なりたい自分」へと接近していく過程の細部にさまざまな学びが偶発的に生起することが明らかになった。

実習生はまずビジネス実践という生きた現実に入り込み、部外者には許されない道具へのアクセスの権利を獲得する。そして、企業独自の文化と歴史を反映した道具に出会い、それを複層的に結合し連鎖させながら、状況に応じた自分なりの新たな意味解釈を施すことで、知が個人内の深層にまで達し「わがもの」となっていく様相がみられた。それは、対象の意味をただ単に個人内の認知的情報処理に固定的に帰着することではなかった。例えば、実習生が初めて知った一つの業界用語（概念的道具）は、真正な営業活動の実践に使われる広告資料（物理的道具）や名刺（物理的道具）などと結びつくことで、その意味が深く理解された。また、その用語を社内外の他者との共通のことば（概念的道具）として運用するうちに、その場の雰囲気や自身の身体的道具で感じ取り、臨機応変に自分らしさを表出するようなコミュニケーション力を身につけていくのだった。

つまり、学びの主体が知識や技術を「わがもの」とする過程では、自己の精神、認識、思考を含む生物体としての「身体的道具」の感覚と情動が他の道具と結びつき、対象にさ

さまざまな意味を付与しながら学びを立体化すると考えられた。

実習生が企業の経済活動に参加し、正統的に一組織成員としての役割を取得すると、実習前の大学生や一般消費者としての単眼的視点は複眼化し、視野が拡大した。実習生が大学にいる間は「ブラックボックス」(Wenger 1990) に閉じ込められて文化的に不透明だった道具は、越境した企業文脈の中で透明なものへと変わる。それは同時に、企業共同体外側に位置づけられていた自己が、アクセスを許された多様な道具を用いながら企業内外の境界を越え、帰属集団の内部に布置されることを意味すると考えられた。

#### 第4章 道具を媒介した学び — 理工学系実習生の事例 —

第4章では、第3章と同様に道具に着目するが、技術職に関わる理工学系専攻の実習生が用いる物理的道具を中心に検討し、「どのように、何を学ぶか」についての考察をさらに進めた。2名の事例を分析した結果、実体のある物理的道具と身体的道具との相互作用によって生み出された数値を符号化し、同じ作業の反復から生まれた暗黙知を形式知(概念的道具)に変換する過程では、「個人レベルでの知識と技術の専有」、「個人間のレベルでの徒弟的關係」の水準での複層的な学びの展開がみられた。

まず、「個人レベル知識と技術の専有」に関しては、技術職者の実践には、眼や手などの身体的道具と実験や点検器具などの物理的道具との相互作用による認知的操作の反復があり、そこから生まれる身体的感覚と情動が技術の修得に結びつくことがわかった。熟達者による指導から始まる「認知的徒弟制」のプロセスでは、課題の難易度、身体的負担、他者との協働構築性が学びの手応えに影響することが示唆された。

次に、「個人間のレベルでの関係」については、身体的道具と物理的道具との直接的な相互作用による技術的な熟達化という垂直的な動きと共に、その2つの道具の間に介在する他者との社会的相互作用を通じた自己変容という水平的な動きがみられた。他者との接触の多寡や構築したネットワークの規模において対照的な2名の実習生による自己概念形成のあり方から、対象志向的で技術的な実践であっても、業務そのものに関わる熟達者との交渉だけではなく、業務内外で多様な他者とつながることが重要で、それによって個人内に構築された多重な成員性が「予備的社会人」の学びとして凝縮されることが判明した。

#### 第5章 水平的関係にある他者とのアイデンティティ交渉

第5章では、個人と実践を媒介する人間志向的な他者に焦点を当て、実習生が「どのようにアイデンティティを形成・再形成するのか」を検証することを目的とした。社会科学系専攻の実習生2名を事例として、企画プロジェクトのチーム実践共同体を構築していく過程での他者との相互行為を通じた学びの軌跡を追った。その結果、同世代の水平的な関係にある日本人学生のメンバーたちと多声的な議論を重ねることで、異種混淆の社会的・個人的アイデンティティが相互作用をし、やがて特徴的な集団アイデンティティが構築されていくことが明らかになった。

集団活動での多様な役割を演じる時、多面的で複数のアイデンティティをもつ個人は、場面や状況に応じて特定のアイデンティティを顕在化させる。その選び取りが他者にどう評価されるかによって共同体での自分の位置づけが変化した。外国人留学生の実習生は、日本語を母語とするメンバーが主流となるチーム内での自他評価の矛盾によって自己呈示の仕方に悩み、葛藤するが、随時「現在の自分」についての内省、「なりたい自分」への希求、「なりたくない自分」からの回避、「なるべき自分」の明確化を繰り返し、漸進的に「なりたい自分」へと接近していったのである。

実習生が同じ共同体の構成員との彼我を隔てる心理的境界を解消するには、個人を国籍や言語などの「社会的アイデンティティ」でステレオタイプ視するのではなく、内的属性である性格や能力などの「個人的アイデンティティ」を肯定的に捉えること、また、個人の独自性と同時に集団秩序による結合性をバランスよく維持するために、自己焦点化した視点を多焦点化させることが必要だった。自己変革的なアイデンティティ調整は、各成員がもつ多様なアイデンティティ資本の相補的な結節を促し、協調的な集団アイデンティティを形成する効果をもたらした。共同体の構築にあたっては、言語や文化を異にする個人間の価値観、知識、技能、立場などの違いが矛盾や葛藤を生むが、それこそが新たな価値の創出につながることも示唆された。

## 第6章 垂直的關係にある他者とのアイデンティティ交渉

第6章では、第5章と同じく他者に注目して、「どのようにアイデンティティを形成・再形成するのか」をさらに検証した。既存の企業組織に参入した実習生が、熟達度において自身と垂直的な関係にある社員や経営者また社外の顧客とアイデンティティ交渉をする過程での学びについての考察を深めることを目的とした。多言語多文化環境にある企業で、正社員とほぼ同様の業務に関与する「中核的業務型」実習に参加した社会科学系専攻の実習生1名の事例を分析したところ、「現在の自分」と「なりたい自分」の差異を縮小するために自己と他者間のアイデンティティ交渉を重ねて、ポジティブな方向へと自己改善を図り、次々と多様なアイデンティティを形成、再形成しながら多様な学びの資源を得ていく過程が明らかになった。

実習生は、ほぼ均質な属性をもつ学生によって構成される大学から企業へ移動することにより、異なる年代、国籍、言語、職種の他者たちと接触する。この多様な属性の他者との接触が、実習生の「現在の自分」についての抜本的な見直しを迫るのだった。事例で取り上げた実習生が大学領域にいた時点での自己評価は高く、日本企業に就職する「なりたい自分」との距離をそれほど遠くないものと見積もっていたのだが、多言語多文化企業の状況は予想とは全く異なっており、優れた外国人社員である熟達者に投影された自己のあり方が大きく揺すぶられる経験をする。実習終了時点では、日本の企業で就業することについて自己効力感を高めながらも、謙虚に学び続けようとする「現在の自分」になっていた。

このような自己変容を見せた実習生の自他間アイデンティティ交渉の過程では、主に次の3つの交渉回路がみられた。1) 熟達者たちを「なりたい自分」のターゲットとする、2) 他者から下された自己についての肯定的な評価を期待される「なるべき自分」とする、3) 他者による第三者についての評価を間接的に自己評価の基準として、「なるべき自分」、「なるべきではない自分」、「なりたい自分」、「なりたくない自分」とするというものだ。

本章で対象とした多言語多文化企業内では、このようなアイデンティティ交渉が構成員の間で頻繁に起こり、実習生は能動的な自己変革の意識をもって、個人の国籍、言語、文化の違いを超越した「超越アイデンティティ」(Greenland & Brown 2000)をもつ内集団カテゴリーの中に取り込まれていった。企業での社会的営みに用いられる多様な道具の中でも特に、意味で満たされたことばによる対話と身体的感覚や情動による共感、共同体を発展させるための他者との共創を成立させていた。言語と文化の異なる個々人はそれぞれの目的や動機をもっているが、集団的な活動を協働的に維持するためには、他の共同体構成員とは互いに対話的關係をもって了解し、共感しながら活動を進めることが重要であるということに実習生は気づいた。

経営者との対話の中では、自身の業務をこなしながら常に他者の状況に気を配る社員たちの間にはりめぐらされた視線の交わりが、当社独自の企業風土を形成していることを認識するのだった。そこには明示的あるいは暗黙的に組み込まれた規範があり、経営者の理念を共有する社員個人がそれぞれのやり方でそれを体現するうちに、協働的な組織が形作られていたことを学んだのである。

## 第7章 総合的考察

第7章ではインターンシップ参加による学びについて総合的に考察した上で、留学生、大学、企業に向けて提言を試みた。

個人史としてつながる時間軸と個人がおかれた社会文化歴史的状況の空間軸との交差にあるインターンシップでの学びとは、真正な企業の状況に埋め込まれたさまざまな道具や他者との相互行為を通して、共同体の特性を反映した知識や技術をわがものとし、「なりたい自分」になっていく全人格的な変容の過程であることが判明した。

企業と大学の間を往還する個人の学びのプロセスは、まず職業領域に入ることでそれまでの無自覚に身に付けていた学習の仕方をほぐすところから始まった。ビジネス実践において実習生は、複雑な物理的および心理的境界を生成、解消し、個人内および個人間を絶え間なく行き来しながら、状況や場面に応じて能動的に行動できる自律性や資質を身につけた。個人の学びは一樣ではないものの、実習生たちに共通してみられた認識、思考、行動を要約すると、大学での予定調和的な学習に基づく他者決定性、依存性、受動性、自己完結性などが、インターンシップの実践によって自己決定性、自律性、主体性、責任感、時間管理能力、忍耐力などといったものに変わり、単なる「大学生」が日本の企業で就業できる「予備的社会人」となるのだった。すなわち、伝統的な教室の学習を越えた企業での

実習が、個々人の学びに深まりと広がりをもたらしたといえる。そしてまた、実習生たちが大学にもどった時、それまでの学びが見直され、さらに将来の人生を展望しつつ自律的かつ能動的に学んでいくといった一連の過程がみられた。

これらの結果を踏まえて、今後の大学教育に向け、本研究の知見を発展的に活用した「ことばを使った実践」を提案した。異質な人間同士がことばを使って多声的で異種混清的な議論を重ね、自律的かつ協働的に活動するような実践である。それは、教員対学生といった固定的で静的な垂直型の教育から、多様な属性をもつ者たちによる問題解決型の教育への志向転換を迫ることになるだろう。

実習をめぐる課題としては、固定的な労働規範に基づく狭義のキャリア観を開放し、個人のあり方の多様性を柔軟に認めて、実習生および企業の双方が学び合えるようなプログラムの体制整備を図ることを指摘した。学びの主体となるべき者は学生に限らない。大学、企業関係者のそれぞれの主体がインターンシップにまつわる問題点を認識し、率直に議論することが必要だといえる。実習を受ける留学生が紐帯となり、大学と企業の双方向的な対話を循環させることは、インターンシップの二重の価値形態に関する問題の解消へともつながるに違いない。また、留学生の学びの経験を理解し、その現実にかかわる個々人が自らの日常実践を反省すること、そして、言語や文化を異にする人間が日本社会において正統的に位置づけられて生きる価値を再考することが重要なのである。

## 終章 まとめ

最後に終章では、本研究の意義と限界、今後の課題について述べた。本研究の意義は、従来の研究でほとんど着目されてこなかった外国人留学生を学びの主体とした点、多層に構成された社会文化的心理的文脈を越境する個人の学びを生涯の一過程として位置付けて、その意味を説いた点にある。一方、本研究の限界として、研究協力者の選定、方法論として用いた解釈的アプローチによる主観性、企業倫理によるデータ収集の制約などが挙げられた。また、本研究の論考では至らなかった点として、本研究で明らかになった学びのより精緻な探究、留学生が大学に戻った後の学びの追究、入社後の組織社会化や職務満足への影響の追跡、受け入れ企業側社員の個人的アイデンティティや組織集団アイデンティティへの影響についてのより深い検証があり、これらは今後の課題として残された。

## 参考文献 和文文献

- 青山征彦・茂呂雄二 (2000) . 「活動と文化の心理学 (特集 文化心理学の展開)」 『心理学評論』 43(1), 87-104.
- 浅井亜紀子 (2006) . 『異文化接触における文化的アイデンティティのゆらぎ』 京都: ミネルヴァ書房.
- 浅田訓永・藪下武司・三輪一統 (2017) . 「中部学院大学経営学部のインターンシップの現状分析」 『中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究』 2, 175-184.
- 浅野智彦 (2013) . 『「若者」とは誰か—アイデンティティの30年—』 東京: 河出書房新社.
- 浅海典子 (2007) . 「学生にとってのインターンシップの成果とその要因」 『国際経営フォーラム』 (18), 163-179.
- 新井幸子 (2001) . 「理想自己と現実自己の差異と不合理な信念が自己受容に及ぼす影響」 『心理學研究』 72(4), 315-321.
- 池崎宏昭・竹澤充 (2004) . 「事例紹介 インターンシップが大学生の就職準備性と労働観やその後の行動に与える影響」 『大学と学生』 (3), 32-42.
- 池田憲彦 (2009) . 「インターンシップ教育の無限の可能性と課題—事前教育の効果に関する一考察—」 『インターンシップ研究年報』 12, 25-31.
- 石黒広昭 (1998) . 「心理学を实践から遠ざけるもの—個体能力主義の興隆と破綻—」 『心理学と教育実践の間で』 (pp. 103-156) 東京: 東京大学出版会.
- 石黒広昭 (編) (2004) . 『社会文化的アプローチの実際—学習活動の理解と変革のエスノグラフィ—』 京都: 北大路書房.
- 今川民雄 (1992) . 「自己概念の変容過程についての追跡的研究(1)—先行する自己概念の影響と仮定された自己志向性をめぐって—」 『対人行動学研究』 11, 13-21.
- 岩淵功一 (編著) (2010) . 『多文化社会の「文化」を問う—共生/コミュニティ/メディア—』 東京: 青弓社.
- ヴィゴツキー, L. 柴田義松 (訳) (2001) . 『新訳版 思考と言語』 東京: 新読書社.
- ヴィゴツキー, L. 土井捷三・神谷栄司 (訳) (2003) 『「発達の最近接領域」の理論—教授・学習過程における子どもの発達—』 東京: 三学出版.
- 上地恵龍 (2011) . 「産学連携教育としてのインターンシップの考察—琉球大学観光科学科アンケート調査を通して—」 『観光科学』 3, 49-57.
- ウェンガー, E. ・マクダーモット, R. ・スナイダー, W. 野村恭彦 (監修) ・野中郁次郎 (解説) ・櫻井祐子 (訳) (2002) . 『コミュニティ・オブ・プラクティス—ナレッジ社会の新たな知識形態の实践—』 東京: 翔泳社.
- エリクソン, E. H. 西平直・中島由恵 (訳) (2011) . 『アイデンティティとライフサイクル』 東京: 誠信書房.
- エンゲストローム, Y. 山住勝広・松下佳代・百合草禎二・保坂裕子・庄井良信・手取義宏・高橋登 (訳) (1999) . 『拡張による学習—活動理論からのアプローチ—』 東京: 新曜社.
- エンゲストローム, Y. 山住勝広・山住勝利・蓮見二郎 (訳) (2013) . 『ネットワークする活動理論—チームから結び目へ—』 東京: 新曜社.
- 遠藤由美 (1992) . 「自己評価基準としての負の理想自己」 『心理学研究』 63(3), 214-217.
- 大和田智文 (2013) . 「若者カテゴリーの知覚に伴って生じる若者カテゴリーへの同化」 『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』 16(2), 49-57.

- 尾形真実哉 (2012) . 「リアリティ・ショックが若年就業者の組織適応に与える影響の実証研究—若年ホワイトカラーと若年看護師の比較分析—」 『組織科学』 45(3), 49-66.
- 尾関美喜・吉田俊和 (2009) . 「集団アイデンティティが集団内における迷惑の認知に及ぼす効果—成員性と誇りの機能的差異に着目して—」 『実験社会心理学研究』 49(1), 32-44.
- オルポート, G. W. 原谷達夫・野村昭 (訳) (1968) . 『偏見の心理』 東京: 培風館.
- ガーゲン, K. J. 東村知子 (訳) (2004) . 『あなたへの社会構成主義』 京都: ナカニシヤ出版.
- 香川秀太 (2008) . 「『複数の文脈を横断する学習』への活動理論的アプローチ—学習転移論から文脈横断論への変移と差異—」 『心理学評論』 51(4), 463-484.
- 香川秀太 (2011) . 「実践知と形式知, 単一状況と複数状況分析と介入, そして質と量との越境的対話」 『質的心理学フォーラム』 3, 62-72.
- 香川秀太 (2015) . 「『越境的な対話と学び』とは何か—プロセス, 実践方法, 理論—」 香川秀太・青山征彦(編) 『越境する対話と学び: 異質な人・組織・コミュニティをつなぐ』 (pp. 35-64) . 東京: 新曜社
- 梶田叡一 (1998) . 『意識としての自己—自己意識研究序説—』 東京: 金子書房.
- 加藤敏明 (2005) . 「立命館大学型コーオペ教育の確立に向けて—人文・社会科学系学部に通化可能な発展型インターンシップの実践的研究—」 『立命館高等教育研究』 (5), 73-84.
- 金井壽宏 (2002) . 『働くひとのためのキャリア・デザイン』 東京: PHP 研究所.
- 株式会社ネクスト. 不動産用語集 <http://www.homes.co.jp/words/m1/525001573/> (2015年10月1日閲覧)
- 亀野淳 (2015) . 「北海道大学における全学インターンシップの特徴と課題—参加学生アンケート調査結果分析 (2014年度)—」 『高等教育ジャーナル 高等教育と生涯学習』 (22), 133-141.
- 亀野淳 (2017) . 「企業の採用活動とインターンシップとの関連に関する定量的分析—企業と大学へのアンケート調査結果をもとに—」 『北海道大学大学院教育学研究院紀要』 128, 155-167.
- 川上郁雄 (2011) . 『「移動する子どもたち」のこころの教育学』 東京: くろしお出版.
- 菊池武剋 (2012) . 「キャリア教育 (特集 この学問の生成と発展—教育・心理—)」 『日本労働研究雑誌』 54(4), 50-53.
- 木谷智子・岡本祐子 (2016) . 「自己概念の多面性と心理的 well-being の関連」 『青年心理学研究』 27(2), 119-127.
- 金水敏 (2003) . 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 東京: 岩波書店.
- 金水敏 (2011) . 「役割語と日本語教育」 『日本語教育』 150, 34-41.
- 楠奥繁則 (2006) . 「自己効力論からみた大学生のインターンシップの効果に関する実証研究—ベンチャー系企業へのインターンシップを対象にした調査—」 『立命館経営学』 44(5), 169-185.
- 楠見幸子 (1989) . 「パーソナリティの自己認知と他者から見られた自己像の認知との関連—学級内の二者関係とその変化による分析—」 『実験社会心理学研究』 29, 27-34.
- 楠見孝 (2014) . 「ホワイトカラーの熟達化を支える実践知の獲得」 『組織科学』 48(2), 6-15.
- 久保田竜子 (2008) . 「日本文化を批判的に教える」 佐藤慎司・ドーア根理子 (編) 『文化、ことば、教育—日本語/日本の教育の「標準」を越えて』 (pp. 151-173) 東京: 明石書店.
- 倉田剛 (2015) . 人工物の哲学—その見取り図と課題— 日本科学哲学会第48回大会 ワークショップ「人工物の哲学」 (2015年11月21日)  
[http://pssj.info/program/program\\_data/48/ws/ws1kurata.pdf](http://pssj.info/program/program_data/48/ws/ws1kurata.pdf) (2018年2月17日閲覧)



- クロガー, J. 榎本博明 (編訳) (2005). 『アイデンティティの発達—青年期から成人期—』 京都: 北大路書房.
- クロス・マーケティング (2016). 『インターンシップに関する調査』 東京: 株式会社クロス・マーケティング (発行).
- 経済産業省 (2006). 社会人基礎力 <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html> (2018年2月17日)
- 経済産業省 (編) (2010). 『社会人基礎力育成の手引き—日本の将来を託す若者を育てるために 教育の実践現場から—』 東京: 河合塾・東京: 朝日新聞出版.
- ゴッフマン, E. 石黒毅 (訳) (1974). 『行為と演技—日常生活における自己呈示—』 東京: 誠信書房.
- コテ, J. 松下佳代・溝上慎一 (訳) (2014). 「アイデンティティ資本モデル—後期近代への機能的適応—」 溝上慎一・松下佳代 (編) 『高校・大学から仕事へのトランジション—変容する能力・アイデンティティと教育—』 (pp. 141-181) 京都: ナカニシヤ出版.
- 小林知博 (2002). 「自己・他者評価におけるポジティブ・ネガティブ視と社会的適応」 『対人社会心理学研究』 2, 35-43.
- 小林祐子 (2008). 「見られ方の違いと親密度および自己呈示欲求が対人不安に及ぼす影響」 『甲南女子大学大学院論集 人間科学研究編』 (6), 27-38.
- 佐伯胖 (1972). 『「学び」の構造』 東京: 東洋館出版社.
- 佐伯胖 (編) (2007). 『共感—育ち合う保育のなかで—』 京都: ミネルヴァ書房.
- 佐伯胖 (監修)・渡部信一 (編) (2010). 『「学び」の認知科学事典』 東京: 大修館書店.
- 酒井理 (2015). 「インターンシッププログラムの教育効果—職業観形成の視点から—」 『法政大学キャリアデザイン学会』 12(2), 25-36.
- 酒井佳世 (2013). 「高良記念研究助成論文 キャリア教育の視点による学生アルバイトとインターンシップの比較—地方私立大学の学生アルバイトによる習得スキル調査と分析—」 『インターンシップ研究年報—』 16, 21-30.
- 酒井幸雄 (2015). 「企業におけるインターンシップ実施意義の一考察—A社インターンシップに参加後、入社した社員の実状を踏まえて—」 『インターンシップ研究年報』(18), 31-37.
- 笹瀬佐代子 (2008). 「ビジネスインターンシップが職業選択に及ぼす影響」 『学術教育総合研究所所報』 (1), 1-26.
- 佐藤慎司・熊谷由里 (編) (2011). 『社会参加をめざす日本語教育—社会に関わる、つながる、働きかける—』 東京: ひつじ書房.
- 佐藤博樹・堀有喜衣・堀田聡子 (2006). 『人材育成としてのインターンシップ—キャリア教育と社員教育のために—』 東京: 労働新聞社.
- 権野信治 (1966). 「適応の指標としての自己概念の研究」 『教育心理学研究』 14(3), 165-172, 192.
- ジェームズ, W. 松浦孝作 (訳) (1940). 『現代思想新書 第6 心理學の根本問題』 東京: 三笠書房.
- 柴山真琴 (2013). 「エスノグラフィの考え方」 田島信元・南徹弘 (責任編集)・日本発達心理学会 (編) 『発達心理学と隣接領域の理論・方法論 発達科学ハンドブック 1』 (pp. 307-315) 東京: 新曜社.
- 自由民主党雇用問題調査会 (2014). 若者雇用対策に関する提言—未来を創る若者雇用・育成の総合的対策を— [https://www.jimin.jp/news/policy/pdf/pdf169\\_1.pdf](https://www.jimin.jp/news/policy/pdf/pdf169_1.pdf) (2018年2月16日閲覧)

- 首相官邸 (2013) . 日本再興戦略 平成 25 年 6 月 24 日閣議決定  
[https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/saikou\\_jpn.pdf](https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/saikou_jpn.pdf) (2018 年 2 月 16 日閲覧)
- 首相官邸 (2016) . 日本再興戦略 2016—第 4 次産業革命に向けて— 平成 28 年 6 月 2 日  
[https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/2016\\_zentaihombun.pdf](https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/2016_zentaihombun.pdf) (2018 年 2 月 16 日閲覧)
- シヨーン, D. A. 柳沢昌一・三輪建二 (監訳) (2007) . 『省察的实践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考—』東京: 鳳書房.
- 新名主雪絵 (2005) . 「インターンシップ生は何を得られたか?—実習プログラムとコミュニケーションから見えてくるもの—」『労働社会学研究』(6), 41-72.
- 末田清子・福田浩子 (2011) . 『コミュニケーション学—その展望と視点— 増補版』東京: 松柏社.
- 菅原良・渡部淳 (2013) . 「就業体験型インターンシッププログラムに関する総括的評価—2012 年度における就業体験の自己効力感に着目して—」『北海道文教大学論集』(14), 185-192.
- 杉浦祐子 (2012) . 「日本における反映的自己研究の現状と課題」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学』58, 129-135.
- 杉山成 (2007) . 「アルバイト経験はキャリア意識の形成にどのような影響を与えるのか」『小樽商科大学人文研究』113, 87-98.
- 須永一道・齋藤智・柳澤利之 (2015) . 「インターンシップ評価に関する効果検証についての一考察」『新潟青陵大学短期大学部研究報告』(45), 35-43.
- ソーヤー, R. K. (編) 森敏昭・大島純・秋田喜代美・白水始 (監訳) ・望月俊男・益川弘如 (編訳) (2016) . 『学習科学ハンドブック 第 2 版 第 2 巻』京都: 北大路書房.
- ソーヤーりえこ (2006) . 「社会的実践としての学習—状況的学習論概観—」上野直樹・ソーヤーりえこ・柳町智治・岡田みさを (編著) 『文化と状況的学習—実践、言語、人工物へのアクセスのデザイン—』(pp. 41-89) 東京: 凡人社.
- ターナー, J. C. 蘭千壽・内藤哲雄・磯崎三喜年・遠藤由美 (訳) (1995) . 『社会集団の再発見—自己カテゴリー化理論—』東京: 誠心書房.
- 高木光太郎 (2001) . 『ヴィゴツキーの方法—崩れと振動の心理学—』東京: 金子書房.
- 高木光太郎 (2010) . 「文化・歴史学派 (ヴィゴツキー学派) の理論とその展開」佐伯胖 (監修) ・渡部信一 (編) 『「学び」の認知科学事典』(pp. 403-422) 東京: 大修館書店.
- 高崎美佐・中原淳 (2016) . 大学在学中の「職」に関わる行動と就職活動に関する調査報告書  
<http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/transmission/investigation/result/> (2016 年 12 月 20 日閲覧)
- 高村和代 (1997) . 「課題探求時におけるアイデンティティの変容プロセスについて」『教育心理学研究』45(3), 243-253.
- 竹内一真 (2014) . 「短期日常業務型インターンシップにおける就職への効果—職業選択とスキル獲得に関する内定学生のリフレクション—」『クオリティ・エデュケーション 国際教育学会機関誌』6, 85-106.
- 竹内倫和 (2012) . 「新規学卒就職者の組織適応プロセス—職務探索行動研究と組織社会化研究の統合の視点から—」『学習院大学経済論集』49(3), 143-160.
- 鑪幹八郎・宮下一博・岡本祐子 (編) (1995) . 『アイデンティティ研究の展望Ⅱ』京都: ナカニシヤ出版.
- 鑪幹八郎 (監修) ・宮下一博・谷冬彦・大倉得史 (編) (2014) . 『アイデンティティ研究ハンドブック』京都: ナカニシヤ出版.

- 鄭殊 (2014) . 「中国人留学生のインターンシップ場面におけるインターアクション行動」 桜美林大学大学院言語教育研究科修士論文.
- 鶴見俊輔 (1994) . 「Unthink をめぐって—一日米比較精神史—」 京都精華大学出版会(編)『リベラリズムの苦悶—I・ウォーラーステインが語る混沌の未来—』 (pp. 1-19) 京都: 阿吽社.
- ディスコ (2017) . キャリタス就活 2018 学生モニター調査結果  
[http://www.disc.co.jp/uploads/2017/03/18internship\\_201703.pdf](http://www.disc.co.jp/uploads/2017/03/18internship_201703.pdf) (2018年2月16日閲覧)
- 手嶋慎介 (2010) . 「大学におけるインターンシップの再検討—質保証と学生支援の充実に関する考察を中心に (1) —」 『東邦学誌』 39(1), 1-9.
- 中井久夫・鶴見俊輔 (対談) (2008) . 「あいまいさでつかむ思想」 『Kawade 道の手帖 いつも新しい思想家』 (pp19-20) 東京: 河出書房新社.
- 長岡健 (2015) . 「経営組織における水平的学習への越境論アプローチ」 香川秀太・青山征彦 (編) (2015) . 『越境する対話と学び—異質な人・組織・コミュニティをつなぐ—』 (pp. 65-81) 東京: 新曜社.
- 中原淳・長岡健 (2009) . 『ダイアログ対話する組織』 東京: ダイアモンド社.
- 中山康雄 (2015) . 人工物の存在論的位置付け 日本科学哲学会第 48 回大会 ワークショップ「人工物の哲学」 (2015 年 11 月 21 日)  
[http://pssj.info/program/program\\_data/48/ws/wslnakayama.pdf](http://pssj.info/program/program_data/48/ws/wslnakayama.pdf) (2018年2月17日閲覧)
- 西口光一 (1999) . 「状況的学習論と新しい日本語教育の実践」 『日本語教育』 (100), 7-18.
- 西平直 (1993) . 『エリクソンの人間学』 東京: 東京大学出版会.
- 日本学生支援機構 (2016) . 平成 27 年度私費外国人留学生生活実態調査概要  
[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/ryuj\\_chosa/\\_\\_icsFiles/afiedfile/2016/12/02/ryujchosa27p00.pdf](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/ryuj_chosa/__icsFiles/afiedfile/2016/12/02/ryujchosa27p00.pdf) (2018年2月16日閲覧)
- 日本学生支援機構 (2017) . 平成 29 年度私費外国人留学生生活実態調査概要  
[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_e/2017/\\_\\_icsFiles/afiedfile/2018/02/23/data17.pdf](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2017/__icsFiles/afiedfile/2018/02/23/data17.pdf)
- 日本学生支援機構 (2018) . 平成 28 年度外国人留学生進路状況・学位授与状況調査結果  
[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_d/\\_\\_icsFiles/afiedfile/2018/02/26/degrees16.pdf](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_d/__icsFiles/afiedfile/2018/02/26/degrees16.pdf) (2018年2月16日閲覧)
- 日本経済新聞 (2017a) . インターン採用の解禁案 文科など 3 省、経団連と調整 2017 年 1 月 11 日電子版 <https://www.nikkei.com/article/DGXLZ011524940Q7A110C1EE8000> (2017年1月11日閲覧)
- 日本経済新聞 (2017b) . 「1 日インターン」への懸念 2017 年 4 月 29 日  
<https://www.nikkei.com/article/DGXXZ015885910Y7A420C1EA1000/> (2017年4月6日閲覧)
- 日本経済団体連合会 (2017) . 採用選考に関する指針  
[http://www.keidanren.or.jp/policy/2017/030\\_shishin.pdf](http://www.keidanren.or.jp/policy/2017/030_shishin.pdf) (2018年2月16日閲覧)
- ネウストプニー, J. V. (1981) . 「外国人場面の研究と日本語教育」 『日本語教育』 (45), 30-40.
- ネウストプニー, J. V. (1995) . 『新しい日本語教育のために』 東京: 大修館.
- 長谷川孝治・浦光博 (1999) . 「自己評価に関する自他の相互影響過程の変容についての検討—アイデンティティー交渉の理論的枠組みを用いて—」 『社会心理学研究』 15(2), 110-124.
- 長谷川孝治・浦光博 (2000) . 「自己評価に関する自他の相互影響過程に対する相互開示の調整効果—アイデンティティー交渉はどのように行われるか—」 『広島大学総合科学部紀要 IV 理系編』 26, 47-61.

- 長谷川孝治・浦光博・前田和寛 (2009) . 「低自尊心者の下方螺旋過程に対する友人関係の進展段階の調整効果」『人文科学論集』(43), 53-63.
- 波多野誼余夫 (編) (1996) . 『認知心理学 5 学習と発達』東京：東京大学出版会.
- 波多野誼余夫 (2001) . 「適応的熟達化の理論をめざして」『教育心理学年報』40, 45-47.
- バフチン, M. 伊東一郎 (訳) (1996) . 『小説の言葉』(平凡社ライブラリー). 東京：平凡社.
- バフチン, M. 桑野隆 (訳) (2013) . 『ドストエフスキーの創作の問題』(平凡社ライブラリー). 東京：平凡社.
- ビーチ, K. 藤野友紀 (訳) (2004) . 「共変移—社会的組織化による知識とアイデンティティの増殖としての一般化—」石黒広昭 (編) 『社会文化的アプローチの実際—学習活動の理解と変革のエスノグラフィー—』(pp. 71-93) 京都：北大路書房.
- 平尾元彦 (2011) . 「インターンシップの就職活動への影響—山口大学 2010 年度 4 年生へのアンケート調査と内定状況調査に基づく考察—」『大学教育』8, 29-36.
- 平野大昌 (2010) . 「インターンシップと大学生の就業意識に関する実証研究」『生活経済学研究』31, 49-65.
- 深津達也 (2012) . 「スポーツ学部系大学生におけるインターンシップ実習の成果と課題—事前研修における『社会人基礎力』の変化—」『研究紀要』9, 73-82.
- 藤瀬文子・古川久敬 (2005) . 「自尊感情と自己認知との関係性—他者からみられている自己に着目して—」『九州大学心理学研究』6, 189-197.
- ブリッジズ, W. 倉光修・小林哲郎 (訳) (2014) . 『トランジション—人生の転機を活かすために—』東京：パンローリング.
- フレイレ, P. 三砂ちづる (訳) (2011) . 『新訳被抑圧者の教育学』東京：亜紀書房.
- 法務省入国管理局 (2018) . 在留資格一覧表  
<http://www.immi-moj.go.jp/tetuduki/kanri/qaq5.pdf>  
 (2018年9月18日閲覧)
- 細川英雄 (2017) . 「言語・文化・アイデンティティの壁を越えて」佐藤慎司・佐伯胖 (編) 『かかわることば—参加し対話する教育・研究へのいざない—』(pp. 191-211) 東京：東京大学出版会.
- 細川英雄・鄭京姫 (編) (2013) . 『私はどのような教育実践をめざすのか—言語教育とアイデンティティ—』横浜：春風社.
- ホッグ, M. A. ・アブラムス, D. 吉森護・野村泰代 (訳) (1995) . 『社会的アイデンティティ理論—新しい社会心理学体系化のための一般理論—』京都：北大路書房.
- 堀有喜衣 (2006) . 「学生の満足度を高めるには—学生から見たインターンシップ—」佐藤博樹・堀有希衣・堀田聡子『人材育成としてのインターンシップ—キャリア教育と社員教育のために—』(pp. 52-91) 東京：労働新聞社.
- 前原裕樹 (2014) . 「バフチンの対話理論による教育実践解釈および教育実践開発に関する研究」兵庫教育大学博士論文.
- 松下佳代 (2002) . 「学生消費者主義と大学授業研究—学習活動の分析を通して—」『京都大学高等教育研究』(8), 19-38.
- 松下佳代 (2003) . 「学習のコンテクストの構成—活動システムを分析単位として—」京都大学博士論文.
- 松山一紀・飛田浩平 (2008) . 「大学生の職業意識とインターンシップの関係」『商経学叢』55(2), 427-442.

- 真鍋和博 (2010) . 「高良記念研究助成論文 インターンシップタイプによる基礎力向上効果と就職活動への影響」『インターンシップ研究年報』(13), 9-17.
- 馬淵仁 (2016) . 「アイデンティティ再考—振り返りと今後の課題」 山本雅代・馬淵仁・塘利枝子 (編) 『異文化間教育学大系 3 異文化間教育のとらえ直し』 (pp. 28-43) . 東京: 明石書店.
- ミード, G. H. 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収 (訳) (1973) . 『精神・自我・社会 (現代社会学大系 第10巻)』東京: 青木書店.
- ミード, G. H. 河村望 (訳) (1995) . 『デューイ=ミード著作集 精神・自我・社会』東京: 人間の科学社.
- 水間玲子 (1998) . 「理想自己と自己評価及び自己形成意識の関連について」『教育心理学研究』46, 131-141.
- 水間玲子 (2002) . 「理想自己を志向することの意味—その肯定性と否定性について—」『青年心理学研究』14, 21-39.
- 溝上慎一 (2008) . 『自己形成の心理学—他者の森をかけ抜けて自己になる—』京都: 世界思想社.
- 見館好隆 (2017) . 「インターンシップによるキャリア育成の効果」 中原淳 (編) 『人材開発研究大全』 (pp. 142-175) 東京: 東京大学出版会.
- 箕浦康子 (編著) (1999) . 『フィールドワークの技法と実際—マイクロ・エスノグラフィー入門—』京都: ミネルヴァ書房.
- 宮副ウォン裕子 (2003) . 「多言語職場の同僚たちは何を伝えあったか—仕事関連外話題における会話上の交渉—」『接触場面と日本語教育—ネウストプニーのインパクト—』 (pp. 165-184) 東京: . 明治書院.
- 宮本美沙子・中田美子・堀野緑 (1994) . 「大学生と高齢者における可能自己と達成関連動機との関係について」『発達心理学研究』5(1), 22-30.
- 三好智子 (2001) . 「“個”-“集団”間葛藤の観点からみた青年期後期の自我同一性の形成過程」『心理學研究』72(4), 298-306.
- 森川由美 (2013) . 「教育専門職による拡張的学習活動—スコットランドのカリキュラム改革—」 一橋大学博士論文.
- 文部科学省 (2010) . 『大学設置基準及び短期大学設置基準の一部を改正する省令の施行について(通知) 平成22年3月12日発信「211文科高第628号」文書』.
- 文部科学省 (2013) . 第2期教育振興基本計画 平成25年6月14日閣議決定  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/keikaku/detail/\\_\\_icsFiles/afielddfile/2013/06/14/133637\\_9\\_02\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/__icsFiles/afielddfile/2013/06/14/133637_9_02_1.pdf) (2018年2月16日閲覧)
- 文部科学省 (2017a) . 平成27年度大学等におけるインターンシップ実施状況について  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_\\_icsFiles/afielddfile/2017/06/23/1387144\\_001.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afielddfile/2017/06/23/1387144_001.pdf) (2018年2月16日閲覧)
- 文部科学省 (2017b) . インターンシップの更なる充実に向けて 議論の取りまとめ 平成29年6月16日インターンシップの推進等に関する調査研究協力者会議  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/076/gaiyou/\\_\\_icsFiles/afielddfile/2017/06/16/1386864\\_001\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/076/gaiyou/__icsFiles/afielddfile/2017/06/16/1386864_001_1.pdf) (2018年2月16日閲覧)
- 文部科学省・厚生労働省・経済産業省 (2014) . インターンシップの推進に当たっての基本的考え方 平成26年4月8日一部改正  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_\\_icsFiles/afielddfile/2014/04/18/1346604\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afielddfile/2014/04/18/1346604_01.pdf) (2018年2月16日閲覧)
- 文部科学省中央教育審議会 (2011) . 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)

- [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/201/02/01/1301878\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/201/02/01/1301878_1_1.pdf) (2018年2月16日閲覧)
- 文部省・通商産業省・労働省(2014)．インターンシップの推進に当たっての基本的考え方  
[http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/intern/sanshou\\_kangaekata.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/intern/sanshou_kangaekata.pdf)  
(2018年2月16日閲覧)
- 柳町智治(2006)．「実践に埋込まれたインタラクション—理系研究室における実験の社会的組織化—」 上野直樹・ソーヤーりえこ・柳町智治・岡田みさを(編著)『文化と状況的学習—実践、言語、人工物へのアクセスのデザイン—』(pp.127-155)東京：凡人社.
- 山崎鎮親(2007)．「アイデンティティの『市場化』とセラピー的物語的アイデンティティの行方」『<教育と社会>研究』17, 1-9.
- 山住勝広(2004)．「越境する実践者の学び—拡張的学習の新しい形態—」『日本の社会教育』(48), 71-84.
- 山住勝広(2006)．創造的な学習活動のためのクロス・スクール・ワーキング—第3世代活動理論からのアプローチ—  
[http://www.chat.kansai-u.ac.jp/katsuhiko\\_yamazumi/file/01.pdf](http://www.chat.kansai-u.ac.jp/katsuhiko_yamazumi/file/01.pdf) (2017年8月5日閲覧)
- 山住勝広(2007)．ハイブリッドな学校システムの開発—拡張的学習からのアプローチ—  
[http://www.chat.kansai-u.ac.jp/katsuhiko\\_yamazumi/file/07-01.pdf](http://www.chat.kansai-u.ac.jp/katsuhiko_yamazumi/file/07-01.pdf) (2018年1月4日閲覧)．
- 山住勝広(2012)．「活動理論と教育的介入の方法論—学校における教師の拡張的学習を事例にして—」『關西大學文學論集』62(3), 21-37.
- 山住勝広(2011)．「文化・歴史的な活動としての学習—活動理論を基盤にした教育実践の探究—」『關西大學文學論集』61(3), 85-108.
- 山鳥重(2010)．「学びの脳科学—神経心理学から—」 佐伯胖(監修)・渡部信一(編)『「学び」の認知科学事典』(pp.295-310)東京：大修館書店.
- 山本都久(2003)．「不適応の測度としての現実自己と他の自己イメージのズレについて」『富山大学教育学部紀要』57, 121-128.
- 横須賀柳子(2006)．「元外国人留学生の入職期における組織社会化の変容過程」『異文化コミュニケーション』(9), 155-171.
- 横須賀柳子(2013)．「インターンシップ場面での課題遂行過程におけるインターンアクション行動」 鄭圭弼・張璐・横須賀柳子共同発表パネル「接触場面での日本語のインターアクション行動—学内と学外に着目して—」 2013年度日本語教育学会春季大会 2013年5月25日 立教大学池袋キャンパス.
- 横須賀柳子(2015)「チーム実践共同体でのアイデンティティ資本の獲得—日本企業でのインターンシップ参加留学生の事例から—」『桜美林言語教育論叢』(11), 51-63.
- 横須賀柳子(2016)．「元留学生外国人社員の職務満足の実態—組織社会化に関する調査より—」『異文化コミュニケーション』(19), 181-193.
- 横須賀柳子(2017)．「外国人留学生のインターンシップ参加を通じたキャリア探索」『グローバル人材育成教育研究』4(1・2), 31-42.
- リクルートキャリア(2018)．就職白書2018—インターンシップ編—  
<https://www.recruitcareer.co.jp/news/pressrelease/2018/180215-02/> (2018年2月16日閲覧)
- リフトン, R. J. 外林大作(訳)(1971)．『誰が生き残るか—プロテウスの人間—』東京：誠信書房.
- レイヴ, J. ・ウエンガー, E. 佐伯胖(訳)(1993)．『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』東京：産業図書.

- ワーチ, J. V. 佐藤公治・田島信元・黒須俊夫・石橋由美・上村佳世子 (訳) (2002). 『行為としての心』 京都: 北大路書房.
- 若林満・後藤宗理・鹿内啓子 (1983). 「職業レディネスと職業選択の構造—保育系, 看護系, 人文系女子短大生における自己概念と職業意識との関連—」 『名古屋大學教育學部紀要. 教育心理学科』 (30), 63-98.
- 渡辺三枝子 (編著)・他 (2018). 『新版 キャリアの心理学 第2版—キャリア支援への発達のアプローチ—』 京都: ナカニシヤ出版.
- 渡部信一 (2010). 「『学び』探求の俯瞰図」 佐伯胖 (監修)・渡部信一 (編) 『「学び」の認知科学事典』 (pp. 3-18) 東京: 大修館書店.

## 英文文献

- Allport, G. W. (1954). *The nature of prejudice*. Reading, MA: Addison-Wesley.
- Ashford, S. J., & Nurmohamed, S. (2012). From past to present and into the future: A hitchhiker's guide to the socialization literature. In C. R. Wanberg (Ed.), *The Oxford handbook of organizational socialization* (pp. 8-24). New York, NY: Oxford University Press.
- Banks, J. A., Au, K. H., Ball, A. F., Bell, P., Gordon, E. W., Gutiérrez, K. D., Heath, S. B., Lee, C. D., Lee, Y., Mahiri, J., Nasir, N. S., Valdés, G., & Zhou, M. (2007). Learning in and out of school in diverse environments. [http://life-slc.org/docs/Banks\\_etal-LIFE-Diversity-Report.pdf](http://life-slc.org/docs/Banks_etal-LIFE-Diversity-Report.pdf) (2017年8月5日閲覧)
- Beach, K. (2003). Consequential transitions: A developmental view of knowledge propagation through social organizations. In T. Tuomi-Gröhn, & Y. Engeström (Eds.), *Between school and work: New perspectives on transfer and boundary-crossing* (pp. 39-62). New York, NY: Earli.
- Bridges, W. (1980). *Transitions: making sense of life's changes*. Reading, MA: Addison-Wesley.
- Chao, G. T., O'Leary-Kelly, A. M., Wolf, S., Klein, H. J., & Gardner, P. D. (1994). Organizational socialization: Its content and consequences. *Journal of Applied Psychology, 79*(5), 730-743.
- Cherry, K. (2016). What is the reflected appraisal process? <https://www.verywell.com/what-is-the-reflected-appraisal-process-2795804> (2018年1月4日閲覧).
- Cole, M. (1996). *Cultural psychology: A once and future discipline*. Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press.
- Collins, A., Brown, J. S., & Newman, S. E. (1987). *Cognitive apprenticeship: Teaching the craft of reading, writing and mathematics. Technical report (University of Illinois at Urbana-Champaign. Center for the Study of Reading) No.403*. Champaign, IL: University of Illinois at Urbana-Champaign, Center for the Study of Reading.
- Collins, A., Brown, J. S., & Newman, S. E. (1989). Cognitive apprenticeship: Teaching the crafts of reading, writing, and mathematics. In L. B. Resnick (Ed.), *Knowing, learning, and instruction: Essays in honor of Robert Glaser* (pp. 453-494). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Cooley, C. H. (1902). *Human nature and the social order*. New York, NY: Charles Scribner's Sons.
- Côté, J. E. (2002). The role of identity capital in the transition to adulthood: The individualization thesis examined. *Journal of Youth Studies, 5*(2), 117-134.

- Côté, J. E., & Levine, C. G. (2002). *Identity formation, agency, and culture: A social psychological synthesis*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Denzin, N. (1978). *The research act: A theoretical introduction to sociological methods*. New York: McGraw-Hill.
- Engeström, Y. (1987). *Learning by expanding: An activity-theoretical approach to developmental research*. Helsinki, Republic of Finland: Orienta-Konsultit Oy.
- Engeström, Y. (2001). Expansive learning at work: Toward an activity-theoretical reconceptualization. *Journal of Education and Work, 14*(1), 133-156.
- Engeström, Y. (2008). *From teams to knots: activity-theoretical studies of collaboration and learning at work*. New York, NY: Cambridge University Press.
- Engeström, Y. (2011). From design experiments to formative interventions. *Theory and Psychology, 21*(5), 598-628.
- Engeström, Y., Engeström, R., & Kärkkäinen, M. (1995). Polycontextuality and boundary crossing in expert cognition: Learning and problem solving in complex work activities. *Learning and Instruction, 5*(4), 319-336.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York, NY: International Universities Press.
- Evans, K., Hodkinson, P., Rainbird, H., & Unwin, L. (2006). *Improving Workplace Learning*. London: Routledge.
- Feldman, D. C. (1976). A contingency theory of socialization. *Administrative Science Quarterly, 21*(3), 433-452.
- Gergen, K. J. (1999). *An invitation to social construction*. London: Sage Publications.
- Goffman, E. (1959). *The Presentation of self in everyday life*. New York, NY: Anchor Books.
- Greenland, K., & Brown, R. (2000). Categorization and intergroup Anxiety in intergroup contact. In D. Capozza, & R. Brown (Eds.), *Social identity processes: Trends in theory and research* (pp. 167-183). London: Sage Publications.
- Grotevant, H.D. (1987). Toward a process model of identity formation. *Journal of Adolescent Research, 2*(3), 203-222.
- Hatano, G., & Inagaki, K. (1986). Two courses of expertise. In H. Stevenson, H. Azuma, & K. Hakuta (Eds.), *Children development and education in Japan* (pp. 262-272). New York, NY: Freeman.
- Higgins, E. T. (1987). Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review, 94*(3), 319-340.
- Hogg, M. A., & Abrams, D. (1988). *Social identifications: A social psychology of intergroup relations and group processes*. New York, NY: Routledge.
- Hymes, D. (1972). On communicative competence. In J. B. Pride, & J. Holmes (Eds.), *Sociolinguistics: Selected readings* (pp. 269-293). Harmondsworth, UK: Penguin Books.
- Ichijama, M. A. (1993). The reflected appraisal process in small-group interaction. *Social Psychology Quarterly, 56*(2), 87-99.
- James, W. (1890). *The Principles of Psychology Vol. 1*. New York, NY: Henry Holt.
- Jordaan, J. P. (1963). Exploratory behavior: The formation of self and occupational concepts. In D. E. Super, R. Starishevsky, N. Matlin, & J. P. Jordaan (Eds.), *Career development: Self-concept theory* (pp. 42-78). Princeton, NJ: College Entrance Examination Board.



- Konkola, R., Tuomi-Grohn, T., Lambert, P., & Ludvigsen, S. (2007). Promoting learning and transfer between school and workplace. *Journal of Education and Work, 20*(3), 211-228.
- Kroger, J. (1999). *Identity development: Adolescence through adulthood*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- Lave J., & Wenger, E. (1991). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Leont'ev, A. N. (1981). *Problems of the development of the mind*. Moscow: Progress.
- Lifton, R. J. (1969). *Boundaries: Psychological man in revolution*. New York, NY: Random House.
- Markus, H., & Nurius, P. (1986). Possible selves. *American Psychologist, 41*(9), 954-969.
- McNulty, S. E., & Swann, W. B., Jr. (1994). Identity negotiation in roommate relationships: The self as architect and consequence of social reality. *Journal of Personality and Social Psychology, 67*(6), 1012-1023.
- Mead, G. H. (1934). *Mind, Self and Society*. In C. W. Morris (Ed.) Chicago, IL: The University of Chicago Press.
- Pettigrew, T. F. (1998). Intergroup contact theory. *Annual review of psychology, 49*, 65-85.
- Reddy, M. J. (1979). The Conduit metaphor: A case of frame conflict in our language about language. In A. Ortony (Ed.), *Metaphor and Thought* (pp. 284-310). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Rogers, C. R. (1951). *Client centered therapy*. Boston, MA: Houghton Mifflin.
- Rogoff, B. (1990). *Apprenticeship in thinking: Cognitive development in social context*. New York, NY: Oxford University Press.
- Rogoff, B. (1995). Observing sociocultural activity on three planes: Participatory appropriation, guided participation, apprenticeship. In J. V. Wertsch, P. Del Rio, & A. Alvarez (Eds.), *Sociocultural studies of mind* (pp. 139-164). New York, NY: Cambridge University Press.
- Savickas, M. L. (2011). *Career counseling*. Washington DC: American Psychological Association.
- Sawyer, R. K. (2014). The new science of learning. In R. K. Sawyer (Ed.), *The Cambridge handbook of the learning science 2nd ed* (pp. 1-18). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Schein, E. H. (1996). Career anchors revisited: Implications for career development in the 21st century. *Academy of Management Executive, 10*(4), 80-88.
- Schieffelin, B., & Ochs, E. (1986). Language socialization. *Annual Review of Anthropology, 15*, 163-191. Palo Alto, CA: Annual Reviews, inc.
- Schön, D. A. (1983). *The reflective practitioner: How professionals think in action*. London: Temple Smith.
- Sfard, A. (1998). On two metaphors for learning and the dangers of choosing just one. *Educational Researcher, 27*(2), 4-13.
- Sullivan, H. S. (1953). *The interpersonal theory of psychiatry*. New York, NY: Norton.
- Super, D. E. (1957). *The psychology of careers: An introduction to vocational development*. New York, NY: Harper & Row.
- Super, D. E. (1980). A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior, 16*(3), 282-298.

- Swann, W. B., Jr. (1987). Identity negotiation: Where two roads meet. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53(6), 1038-1051.
- Tajfel, H. (1972). Social categorization. English manuscript of "La catégorisation sociale". In S. Moscovici (Ed.), *Introduction à la psychologie sociale*, 1, 272-302.
- Tajfel, H., & Turner, J. C. (1986). The social identity theory of intergroup behavior. In S. Worchel, & W. G. Austin (Eds.), *Psychology of intergroup relations 2nd ed* (pp.7-24). Chicago, IL: Nelson Hall.
- Tuomi-Gröhn, T. (2005). Studying learning, transfer and context: A comparison of current approach to learning. In Y. Engeström, J. Lompscher, & G. Rückriem (Eds.), *Putting activity theory to work: Contributions from developmental work research* (pp. 21-47). Berlin, Federal Republic of Germany: Lehmanns Media.
- Tuomi-Gröhn, T., & Engeström, Y. (Eds.). (2003). *Between school and work: New perspectives on transfer and boundary crossing*. Amsterdam, The Netherlands: Pergamon.
- Turner, J. C. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford, UK: Blackwell.
- Van Maanen, J. (1976). Breaking in: Socialization to Work. In R. Dubin (Ed.), *Handbook of Work, Organization and Society* (pp. 67-130). Chicago, IL: Rand McNally College Publishing Co.
- Vygotsky, L. S. (1962). *Thought and language*. E. Hanfmann & G. Vakar (Trans. & Eds.). Cambridge, MA, US: MIT Press.
- Vygotsky, L. S. (1978). *Mind in society: The development of higher psychological processes*. In M. Cole, V. John-Steiner, S. Scribner, & E. Souberman (Eds.). Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Wanous, J. P. (1992). *Organizational entry: Recruitment, selection, orientation, and socialization of newcomers 2nd ed*. Reading, MA: Addison-Wesley.
- Wanous, J. P., Poland, T. D., & Premack, S. L. Davis, K. S. (1992). The effect of met expectations on newcomer attitudes and behaviors: A review and meta-analysis. *Journal of Applied Psychology*, 77(3), 288-297.
- Wartofsky, Marx W. (1979). *Models: Representation and scientific understanding*. Dordrecht, The Netherlands: Reidel.
- Wenger, E. (1990). *Toward a theory of culture transparency: Elements of a social discourse of the visible and the invisible*. Doctoral dissertation, University of California, Irvine.
- Wenger, E. (1998). *Communities of practice: Learning, meaning, and identity*. New York, NY: Cambridge University Press.
- Wenger, E., McDermott, R. A., & Snyder, W. (2002). *Cultivating communities of practice: A guide to managing knowledge*. Boston, MA: Harvard Business School Press.
- Wertsch, J. V. (1998). *Mind as Action*. New York, NY: Oxford University Press.
- Young, M. F. D. (1998). *The curriculum of the future: From the 'new sociology of education' to a critical theory of learning*. London: RoutledgeFalmer.
- Zimmerman, D. H. (1998). Discourse identities and social identities. In C. Antaki, & S. Widdicombe (Eds.), *Identities in talk* (pp. 87-106). London: Sage.